特別支援学校（聾学校）幼稚部における「話し合い活動」（その2）
―活動展開をめぐる様々な課題―

企画者　庄司和史（信州大学学術研究院総合人間科学系）
松本末男（筑波大学附属学校教育局）
司会者　庄司和史（信州大学学術研究院総合人間科学系）
話題提供者　上山知子（広島県立広島南特別支援学校）
小柳達朗（筑波大学附属聴覚特別支援学校）
指定討論者　齋藤佐和（筑波大学名誉教授）
松本末男（筑波大学附属学校教育局）

KEY WORDS: 聴覚障害　話し合い活動　言語指導

【企画趣旨】

我々は、昨年の本学会第54回大会自主シンポジウム102において、聾学校幼稚部における言語指導の活動である「話し合い活動」を取り上げ、授業改善への取り組み、活動上の課題、言葉の押さえの３つの視点から話題提供した[1)]。そしてまずこの「話し合い活動」が対話を通して言葉を育てる自然法の理念に基づいた活動であること、実際の展開の中では、実態差のある子どもの様々な表現を受け止め個々の発達に即して言葉を指導していくこと技術が求められることなどを確認した。

幼児期の教育活動は総合的に展開されるものである。聾学校の「話し合い活動」も「言葉」の領域だけでなく、幼稚園教育要領の他の領域を含み、また自立活動の要素も含んだ総合的な活動として行われる。この活動の実践上の難しさにはこのような側面もある。つまり、子どもの興味関心に沿って話題を選択し展開すると一口に言っても、そこには様々な領域の要素が関連していることを踏まえる必要があり、この活動の実践は教育課程全体にかかわる。また、予め展開を計画する活動ではないということは、保護者に対して活動のねらいや内容を説明し理解してもらうことの難しさにつながる面がある。つまり保護者支援との関係も重要になる活動である。

今回、この活動の実践を行っている聾学校幼稚部の担当教員から日々の実践において苦慮しているところ、改善への取り組み等についての生の声を話題提供していただき、実践上の具体的な課題について議論を深めたい。

【話題提供者の趣旨】上山知子

これまで教師主導の傾向が強い「朝の会」などを進めてきたが、昨年度（H28度）の授業研究を通して、もっと子どもに寄り添った、子どもと共に楽しむ活動を展開していくことが大切だと考えた。そこで教師が予め準備した内容ではなく、子どもからの発信をもとに活動を展開していくことを心掛けた。毎日の授業では、「この話題を取り上げ、展開させていったことは良かったのだろうか」、あるいは「あの言葉はあの場面で押さえておくべきだったのではないだろうか」等反省ばかりである。展開においては、その時その場での判断力が必要とされることを痛感している。現在、「話し合い活動」においては、個々の実態把握、発問・支援方法の検討、話題につながるような環境設定、イメージマップの作成等行い、日々実践を行っている。

【話題提供者の趣旨】小柳達朗

学級集団の中で「話し合い活動」を進める上では、とくに、子どもから出てくる話題を取り上げ、それを全体で共有していくこと、その話題についての子どもたちのやりとりが活発になるようにしていくことを心がけてきた。子ども達は、自分の思ったことや経験したことについてお互いに話をしていくが、子ども同士のやりとりの中では、話し手の話の内容が聞き手に伝わらない場面も多く、その結果、子どものやりとりをする意欲がなくなってしまうようなこともよく起きている。このような場面では、聞き手の子どもが理解できるように視覚的な手がかりを使ったり、言葉を言い換えたりし、その話題への関心を持続させながら活動を展開しようと考えてきたが、これは非常に難しいことだと実感している。また、「話し合い活動」を通して、家庭での親子のやりとりにつなげたいと考え、その時々の子どもの成長や状態に応じて保護者と相談しながら取り組んでいるが、保護者に活動の意図やねらい、方法、先の見通しについて十分に説明し、理解をしてもらうことがとくに難しいと感じている。

【指定討論者の趣旨】松本末男

幼稚部の「朝の話し合い活動」については、指導の趣旨も含めて初めて幼稚部を担当した先生方には、その指導がわかりにくいと言われる。本シンポジウムでは、若手の先生方から提案していただく「話し合い活動」の難しさ、面白さ、手応え等、指導に当たって大事にしたいことを中心に話し合いたい。また、子どもの構成によって大きくねらいが変わること、話題とすべきことの取捨選択の問題、子どもの「伝えたいこと」を大事にしながら教師がその「伝えたいこと」を分かるための持つべき情報や事柄等、教師が今ここで、何をしたら良いのだろうかという課題が少しでも明確になればと考えている。

【指定討論者の趣旨】齋藤佐和

子どもの気持ちや考えに沿った対話を展開することで、認知発達に結びついた言葉が形成されていく。大人との、また子ども同士のやりとりの積み重ねが将来に続く大切な対話習慣を育ててくれる。緩慢な歩みに見えても、週、月、年のスパンで振り返れば、話し合い活動は実り多い活動である。発達に沿い、一瞬一瞬の心の動きを捉え、必要な言葉を繰り出していく教師の苦労は大きいが、困難点を共有し解決の方向を探る作業を通して、方法としての要件を明らかにしていきたい。

【文献】

1)日本特殊教育学会第54回大会自主シンポジウム102（企画者：庄司和史・松本末男）（2016）特別支援学校（聾学校）幼稚部における「話し合い活動」-言語指導に関する専門性の集約と敷衍を目指して-. 第54回大会論文集.

(SHOJI Masashi, MATSUMOTO Sueo, KAMIYAMA Satoko
KOYANAGI Tatsuro , SAITO Sawa)